日本における J．- P．サルトルの受容についての一考察
—翻訳・出版史の視点から—

石　井　素　子

はじめに

日本におけるサルトル受容

本論は、20世紀を代表する思想家・文学者の一人である、ジャン - ポール・サルトル（1905-80）の著作（あるいは活動）が、わが国に紹介・輸入されるプロセスに注目しつつ、そのあり方の記述と分析を試みようとするものである。

サルトルの活動は、哲学論文から小説、戯曲、ジャーナリズムにいたる、大きな多面性をもっており、彼が与えた影響は、職業的知識人・文化人にとどまらず、広く一般公衆にもおよんでいる。またその活動は、本国フランスを超えて、全世界的な影響力をもってきた。

1905年パリに生まれたサルトルは、高等師範学校を卒業後、教授資格試験（アグレガシオン）の哲学に１番で合格し、フランス国内でのぞむべき最高の学歴を獲得し、エリート知識人としての道を歩んでいく。かけがいのないこの自分の経験を究極の拠り所にしつつ、世界（他人や社会をふくむ）への態度を築き上げていく方法を、哲学論文の形で、また小説や戯曲などのフィクションの形で探求する。実存なるものも社会的に規定されたイデオロギーに過ぎない、という構造主義的な主張が世を席巻するようになると、しだいに社会的影響力を弱めていくようになるが、近年になって、構造主義の行き過ぎを批判するカウンター・バランスとして、また構造主義が本来立脚すべき根拠を示唆する指標として、新しい関心を呼び覚ますようにもなっている。

わが国においては、本格的な文筆活動開始後まもなくの1930年代末から、すでにサルトルの紹介がはじまっていたが、その動きが本格化したのは、戦後のことである。

日本におけるサルトル受容の実態と特徴はどのようなものであったか。またそこから見えてくるのはどのようなことであるか。本論では、日本におけるサルトル紹介・受容過程の特徴を描出するにあたっての第一歩として、出版史的なデータと関係者の談話に基づく調査と分析を行ないたいと思う。

サルトル受容史概観

1937年前後にサルトルの原書を読みはじめ、後に『嘔吐』を翻訳することになる仏文学者の白井浩司（1917-2004）や戦中戦後の一時期の沈黙時代にサルトルにちなんで猿取哲（さるとる・てつ）という筆名を用いていた評論家・大宅壮一（1900-70）から、1970年代後半[1]にいたるまで、サルトルが約40年の長きにわたって、日本の知識人に対して与えてきた影響力[2]をうかがわせる証言は、評論家でサルトルの翻訳者でもある加藤周一（1919-　）や小説家の大江健三郎（1935-

）をはじめとして枚挙に遑がない。

サルトル受容史の頂点を示す出来事は、1966（昭和41）年9月のサルトルとボーヴォワールの来日である。彼は4週間の日本滞在中、東京と京都で合わせて3回の講演を行なった（慶応大学主催1回、朝日新聞社主催2回）。同年6月のビートルズの来日公演同様、社会現象とでもいうべき騒ぎが巻き起こされたことは、諸資料から知ることができる。それほどの大衆的影響をもつ知識人が存在しない今日では、サルトル来日の引き起こしたインパクトを想像することは難しくなっているかもしれない。

影響力をもつ知識人の著作が、海外においてどのように受け取られ、位置づけられるにいたるか。本論では、そのような関心に立脚して、サルトルの著作の日本における＜輸入＞過程を問題にしたいと思う。そのために前提となるのが、先行研究の知見である。

1．先行研究

1．1．フランス本国におけるサルトル―「全体的知識人」を社会学的に分析する―

フランス本国におけるサルトルの影響力は、ブルデュー派の知識社会学者（P.ブルデュー、A.ボスケッティ、G.サピロら）によってしばしば言及され、考察されてきたテーマである。彼らは、サルトルを「一世紀にわたる歴史のなかであらゆる尺度において形成されたフランス知識人の形象の具現であり到達点であった」[3]とみなし、彼があらゆる知的戦線に出動する「全体的知識人（intellectuel total）」としてフランスの知識人界において1945年から60年代初めにわたり覇権を制した理由を、その「天才」に求めるのではなく、社会学的分析によって明らかにすべきだと主張してきた。

その方法は、「界（champ）」の理論に基づく。つまり、「自律的」な、すなわちそれ自身に固有の論理にしたがって運行する社会関係システムである知識人「界」のなかで、競争者たちが打算では作り出せない「方向感覚」によって導かれるような「戦略」をめぐらせて、支配権に向けて闘争し、一連の位置決定と移動がなされるものとして、知的生活を描き出すのである。

史上類例のない強大なサルトルの覇権を説明するのは、知識人の「王道」として文句のつけようのない学歴に加え、フランスの知識人の歴史のなかで徐々につくりだされ確立してきた「教授（哲学者）」と「作家（文学者）」という、知識人であるための別個のキャリアを、彼が一身に具現化してしまったことだとされる。それは、サルトルのたどった軌道が、知的活動のゲームの規則と、界の期待とに対して、ずば抜けた適合性を示し、まるでそれと自覚せぬままに、当時フランスの文学界と哲学界が待望していた収斂的変遷を、必要な形式に則って、必要な継承の手続きを踏んで作り出すという一つのプログラムを追求し実現したといったふうに見えるというのだ。そしてまた、サルトルの覇権には、時世にかかわる諸要因[4]も決定的なかたちで作用していた、というのが彼らの見解である。

1．2．＜思想の輸入＞―フランスとアメリカでデリダはどう受容されたか―

フランス国内の知識人界のなかでのサルトルの位置づけを試みた上述の立場からの研究は、一つの界における個人の軌道を考察する上では非常に有用であるが、その個人が他の界に置かれることになったとき、その個人が果たしうる役割を考察する枠組みとしては十分ではないと言わざ

るを得ないだろう。なぜならば、他の界におけるその個人の役割を考察するためには、元の界と新しい界の関係自体が考察対象に据えられなければならないはずだからである。彼らの論は、「一国社会学」的な制約をもつものであり、文化の＜輸入＞を扱う本論の準拠枠としては不十分である。

ブルデューの知識社会学を参照しつつ、国外での知識人の受容のされかたに研究の焦点を当てた「思想の輸入」研究の嚆矢として挙げられるのが、M．ラモンの研究「How to become a dominant French philosopher : The case of Jacques Derrida」[5]である。

この研究は、サルトルの次世代に属するフランスの代表的知識人ジャック・デリダ（1930-2004）が、いかにしてフランスとアメリカの二つの国でそれぞれに異なる方法で成功したか、つまり「正統性（legitimacy）[6]」を獲得したのか、その文化的・制度的・社会的諸条件を分析したものである。それはより一般的にいえば、文化的「商品」がある文化・社会において重要なものとみなされるにいたる条件は何なのか、という問題の解明をめざすものである。

ラモンの知見を一言で言えば、デリダの理論が「正統性」を獲得できたのは、彼の理論が、仏・米両国のそれぞれに高度に構造化された文化的・制度的システムとうまく合致したからだということになる。

フランスでデリダが成功したのは、彼が、小規模なアカデミック哲学者集団よりも、多数の文化的公衆を念頭において自分の理論を市場に乗せたことによる。その結果、デリダの理論は、ステータスシンボルとして、1960年代後半の政治状況に対処するための新しく洗練された方法として、知的な関心をもつ大衆にアピールしたのである。フランスのアッパー・ミドル階級は、一般に一般文化雑誌を通じて文化資本の重要な形態としての知的文化を獲得する。つまり、その普及に貢献したのは（一般的な）文化のメディアであって、学術雑誌はあまり影響力をもたなかったのである。

一方アメリカに輸入されるにあたって、デリダ本人とともに高名な文芸批評家集団が、デリダの理論を再構成し、諸大学の文学部へと普及させた。デリダは市場を共有する他のフランス人理論家たちと同時にアメリカに輸入されたが、彼らの受容のされ方と比較すると、デリダの需要の特徴は、文芸批評という一つの学問領域に集中して強大な支持を得たことである。そしてアメリカの一般的なアッパー・ミドル層においては、知的生活はそれほど重視されていないので、アメリカでデリダの普及に中心的な役割を果たしたのは、研究者の専門家組織と学術雑誌であったということになる。

ここからわかることは、一つの理論が正統性を獲得する過程には、理論それ自体の内在的な質だけでなく、複雑な環境の相互作用の関与をみるべきである。つまり、正統性の獲得には、理論そのものの価値とは別の要因（制度的な支援と知的協力者の存在、理論とそれがおかれている知的・文化的文脈）を、考慮する必要があるということである。

このようなラモンの論の特徴は、**1．1．**で見た立場の持っていた言わば「一国社会学」的な制約を乗り越えて、一つの界と他の界との関係（タイムラグをも含む）関係の考察に道を開こうとするところにある。フランスにおけるデリダとアメリカにおけるデリダの関係を考察するというラモンの問題関心のありかたは本論の問題関心にきわめて近接する側面をもっていると言えよう。

2．前期サルトルの受容

2．1．最初の翻訳者と仏文の学生たち

本稿では、日本におけるサルトル受容史を前期・中期・後期に三分した上で、前期・中期を考察したい。[7]

日本においてサルトルが最初に翻訳紹介されたのは、『中央公論』1940（昭和15）年1月号に掲載された短編『壁（原題 Le mur)』である。翻訳者は詩人・翻訳家の堀口大学（1892-1981）であるが、白井によれば、この堀口訳はほとんど反響を引き起こしていない。[8] サルトルを日本に本格的に紹介することになるのは、堀口よりも若い世代のフランス文学（研究）者（ないしはその候補生）たちであった。当時より仏文専攻の学生のなかには、フランスの文学雑誌『新フランス評論（Nouvelle Revue Française)』(N.R.F.）[9]を定期購読する者もあったが、その中の一人で当時慶応予科の学生であった白井浩司がはじめてサルトルを読んだのが、N.R.F.誌1937年7月号に掲載された『Le mur』であった。[10]ここからわかるのは、サルトルをはじめて翻訳紹介した者たちは上述の堀口も含めて、フランス本国とほぼリアルタイムでサルトルを読んでいたという事実である。

そして、日本において後々までのロングセラーとなった『嘔吐』の翻訳が刊行される。以下は、翻訳者の白井の回想である。「ＮＲＦ誌の広告欄にサルトルの最初の長編小説『ラ・ノーゼ（La nausée)』の近刊予告が載ったのはいつのことだったか。忘れもしない一九三八年の初夏、三田の、いまで言えば八角塔のある旧図書館の前で私は、佐藤朔氏[11]に呼びとめられた。「きみ、丸善にラ・ノーゼが入っているよ」。私は授業に出席するのをやめて丸善に直行し、たった一冊残っていたラ・ノーゼ、すなわち私が『嘔吐』と訳す小説を買い求めた。丸善の洋書部では、見込み注文は三冊ときまっていたので、他の二冊は、春山行夫氏と佐藤朔氏の手に渡っていた。」[12]

1938年当時、丸善で販売された洋書の購入者をトレースできるほど日本におけるフランス文学の界は小さなものであったが、しかし大学の仏文科や洋書取り扱いの丸善といった文学の輸入装置はすでに整備されていたことは注目に値する。[13]そして、当時の社会・政治状況に目を向ければ、日中戦争の発端となった盧溝橋事件が起こったのが1937（昭和12）年の７月のことであり、日本の出版界は、同年後半以降、戦時出版体制へと突入することになる。[14]サルトルの初期の受容はこのような文脈のなかで行なわれた。

二十歳すぎの慶大仏文科生であった白井は、原書を入手し「字引と首っ引きで」半年かけて読了すると、まもなく翻訳を開始し、二年後に訳し終える。訳文を見てもらうため原稿を預けた高橋廣江（慶大文学部予科フランス語教師）が主宰し発刊した雑誌『文化評論』の創刊号　(1941年12月）に、白井訳の『嘔吐』の最初の部分が掲載された。さらに第２号に続きが掲載されたが、太平洋戦争開戦と相前後して創刊されたこの雑誌は、用紙の配給の停止により廃刊を余儀なくされる。中村真一郎がこの時のことを回想して「私にはその小説の画期的な新しさについては、まだ判っていなかった。」[15]と書いているが、白井自身も、一般の反響は「こんな難しい小説のどこが面白いのか」というものだったと記しており、1940年代初頭の時点での、サルトルの読まれ方がうかがわれる。

「1940年代になると、戦争のためにフランス書が入手出来ずサルトルの消息も途絶えて、（中略）そして、戦時中や、戦争直後のサルトルの活躍ぶりや、実存主義のことなどが、わかったのは、1940年代が終る頃のことであった」[15]と佐藤朔が、また「フランス文学が堰を切ったように盛んに翻訳されるようになったのは、なんといっても第二次大戦後になってから」と、フランス文学者・西永良成が語っている。[16]本格的にサルトルが日本で紹介され出すには、戦後になるのを待たねばならない。

2．2．京都　世界文學社

ここまでサルトルの最初期の紹介について追ってきたが、それらはいずれも雑誌掲載という形態をとるものであった。日本で最初に刊行されたサルトルの単行本は、京都の世界文學社から終戦後まもない1946（昭和21）年に刊行された『水いらず・壁』である。

日本におけるサルトルの受容には京都の出版社が大きく関与している。はじめての翻訳単行本を世に出したのは世界文學社であり、世界唯一という『サルトル全集』を刊行したのも京都の人文書院であった。それには、単に偶然で片付けることのできない理由があったのではないかと考えられる。[17]

先の大戦直後、京都の出版業には活気が漲り、「出版ルネサンス」と呼びうるような時期があった。[18]京都は東京と違って空襲の影響がほとんどなく、印刷機や資材が残っていたことが幸いした。大阪から京都に移ってきた出版社も多く、総数205社といわれる活況であった。もちろん京都は、学校が多く書き手・読者にも恵まれた土地柄である。戦中の厳しい出版統制から自由になったため「雨後の筍のように新しい出版社ができ」た。その京都「出版ルネサンス」の一翼を担ったのがここに取り上げる世界文學社であり大雅堂であった。

世界文學社は、太平洋戦争中に文藝春秋社の社員であった柴野方彦が社長となり、終戦後まもなくの1946（昭和21）年4月に月刊誌『世界文學』を創刊した。第2号より仏文学者伊吹武彦(1901-82)を編集者に迎え（第33号まで）[19]、1950（昭25）年、第38号をもって廃刊になるまでの5年間、最新の外国文学の状況について積極的に紹介しつづけた。『世界文學』には多くの高名な知識人が寄稿している。[20]1953（昭和28）年頃には会社自体が消滅したが、それまでは雑誌だけでなく、翻訳書、和書あわせて多くの単行本を出版した。

世界文學社において、サルトルはまず『世界文學』誌上において紹介された。1946（昭和21）年10月号（通巻第6号）の短編「水いらず（原題：Intimité 1938年刊)」（吉村道夫訳）である。冒頭には、サルトルの近影入り紹介文が１ページ分掲載されているが[21]、この紹介文から見てこの時点で一般にはまだ知られていない作家であったことがわかる。中村真一郎によれば、「戦後、最初に世間に評判を呼んだのは、流麗な翻訳と大胆な内容によって時流に投じた、短編『水いらず』[22]であった。」[23]

これを受けてただちに単行本化されたのが、世界文学叢書の３冊目として同年12月に刊行された『水いらず・壁 / ジャン・ポール・サルトル（伊吹武彦，吉村道夫譯)』である。雑誌掲載から単行本になるスピードは速い。[24]伊吹は後の人文書院『サルトル全集』初期の重要な翻訳者であるが、この「壁」の翻訳は、大雅堂発行の雑誌『時論』第1巻第6・7号に掲載されたものである。[25]　『時論』を出していた大雅堂の倒産が1949（昭和24）年、『世界文學』の廃刊が1950

（昭和25）年というように、戦後京都の出版状況の雲行きは40年代末頃から怪しくなり始めた。このころには、「戦争直後のように本であれば何でも売れたという時代は終わりを告げ」た。そして1949（昭和24）年には出版物の一元的配給機関・日本出版配給会社（「日配」、1941年設立）がＧＨＱから独禁法違反として閉鎖命令を受け、この余波で多くの出版社が脱落し、京都の出版社も最も盛んな頃の4分の1近い65社にまで激減した。[26]　日本初のサルトルの単行本の出版は、このように終戦直後ににわかに活発化した一時期の京都の出版事業の果実であったと考えられるのである。

２．３．フランスとの「時差」

また、２．１．で言及した白井訳の長編小説『嘔吐』も、『水いらず・壁』刊行の２か月後の1947（昭和22）年2月に東京の青磁社からシリーズ『現代仏蘭西小説集』の一冊として出版された。「赤い表紙の拙訳『嘔吐』が店頭に山積みされているのを見て、暗澹たる十年がやっと終ったのだ、という想いが込み上げてきた」と白井は記している。[27]彼が丸善で原書を購入して読んでから９年が経過している。

すでに見たように、1937－38（昭和12－13）年頃、『N.R.F.』誌をフランスから取り寄せて熱心に読んでいた日本のサルトルの最初期の読者たちは、作家として注目を浴び始めたばかりのサルトルの紹介や翻訳を、同時代人として試みていたのではなかっただろうか。しかし、太平洋戦争の開戦から日本の敗戦後まで、日本のサルトル受容は停滞を余儀なくされることとなった。

一方サルトルにも、1929年から1931年までの１年半の兵役と、1939年の召集、1940年にドイツ軍の捕虜に、という戦争経験がある。この戦争体験はサルトルにとって決定的な影響を与えたものだと考えられている。最晩年(1978年)のサルトルは、人生において最も印象的な事件はと尋ねられ、「捕虜になったこと」と答えている。[28]サルトルはこの戦争体験をふまえて、「作家は作品を通して時代の現実に意識的にかかわるべしとするアンガジュマンの理論」[29]を展開することになった。1945年にはサルトルはボーヴォワール、メルロー＝ポンティーら仲間とともに月刊誌『レ・タン・モデルヌ』(Les temps modernes）を創刊し、政治的・社会的発言の場とした。

その結果、1937―8年頃から1950年前後の十年あまりの間に、思想と活動の軌跡が大きな変化を遂げたサルトルと、＜『嘔吐』(フランスで1938年に刊行、日本の翻訳は1947年刊行)のサルトル＞のまま受容がほとんど停止していた日本の紹介者・読者の間には大きな溝が生ずることになった。そして仏文の学生としてリアルタイムにサルトルの「文学」作品を愛読した読者のなかには、このサルトルの「政治化、社会化」と呼びうるような変化に困惑を隠せないという事態に陥りつつ、サルトルの紹介者の役割を果たし続けることになった白井浩司のような存在があることは見逃せない。

３．中期サルトル受容

日本は「世界で最も多くサルトルの本、そしてサルトル研究書が読まれている」[30]と言われる国であり、また世界で唯一『サルトル全集』が刊行された国である。日本のサルトルの受容を考える上で、サルトルの日本の総出版元である人文書院の果たした役割を抜きにすることはできないだろう。[31]

3．1．＜「サルトル」の人文＞前史

現代的な流通販売制度の源流は、大正期の出版業界に見出される。それまで未分化だった経営体の版元・卸・小売の兼営状態が、第一次大戦中から戦後にかけて、急速に専門分化するという事態が観察され、この時期、独自性のつよい多くの出版社が誕生した。[32]

1922（大正11）年に創業された人文書院もその一つである。創業者の渡辺久吉は愛知県の出身で、京都の仏教専門学校（現・仏教大学）卒業後、河原町二条下ルで、自身の関心の深かった心霊学研究のため「日本心霊学会」を創設し、関係書を数点出版した。1927（昭和2）年京大心理学教授の今村新吉の命名で「人文書院」と改名、心理学書と国文書を中心に本格的な出版業を開始した。

1944（昭和19）年戦時中の企業整備により、立命館出版部ほか数社で「京都印書館」を設立統合したが、1947（昭和22）年12月に退社、人文書院を再開した。再開初年度の新刊6点中翻訳書は1冊もなく、国文学系が4点である。翻訳書の展開は翌1948（昭和23）年の『キルケゴオル選集』が皮切りとなった。同年には一挙に7巻、翌年にはさらに8巻と、人文書院の勢いある全集発行のスタイルは『サルトル全集』以前に始まっていたことがわかる。当時を回想して「この馬鹿げた戦争の要因に、西欧文明への日本人の無知から由来するところが大きいと通感していました。西欧人の緻密な思考の成り立ちや、ギリシア以来二千年の歴史に、いまこそ謙虚に学ぶ必要がある。わたしの思いは、いつも、そこへ回帰し、出版企画もその方面、つまり翻訳出版に向かっていったのです」と現社長の渡辺睦久（1920-　）は語っている。キルケゴールの出版を決めたのは睦久であり、戦前に少し紹介されていただけのキルケゴールの著作集全15巻は話題を呼んだという。「地味な哲学書」だけでなく文芸書を、と次に選ばれたヘッセは、飛び込みのような出版許可依頼の手紙を送り、本人から快諾されたという逸話をもつ。1950（昭和25）年の『郷愁』は１年で13万部の部数が記録されている。

3．2．1950年　―　『サルトル全集』刊行

次はぜひフランスの「奥行きの深い」文学や哲学を、と白羽の矢を立てられたサルトルは、ヘッセのように睦久だけで決めた著者ではなかった。人文書院が『サルトル全集』の出版に乗り出したのは、仏文学者の生島遼一（1904-91）と桑原武夫（1904-88）の知人でパリ在住の彫刻家高田博厚（1900-87）にと連絡をとることに成功し、パリの出版社の情報を得られたことによる。それによって彼は、サルトルとボーヴォワールがフランスで若者に支持されていることを知った。渡辺睦久は当時のいきさつをこう振り返る。「現代フランス文学に詳しい佐藤朔さんや、白井浩司さんとも何度も相談し」研究した結果、当時のフランスで最も人気があるのがサルトルとカミュで、とくにサルトルは幅のひろい作家・思想家であることがわかった。「戦後の不安のただ中で、人間の存在、生きる意味を問うているのは、フランスの青年も日本の青年も同じである、人文書院でぜひ『サルトル全集』を刊行したい、という旨を、サルトルに直接手紙で訴えた」。東京のフランス著作権事務所の助言もあり、サルトルの出版社であるガリマール社は、既刊書11冊セット（前払い金65万円）という契約を提案した。すでにサルトルの翻訳出版をガリマール社と交渉していた他の東京の出版社は、売れそうなものを選択して単体で刊行する交渉を行なっていたた

め、当初から全集を構想して交渉にあたった人文書院がそれらを出し抜いて翻訳権を獲得できたと考えられる。当時の65万円は非常な高額で「それこそ清水の舞台からのつもりで」契約をしたという。その結果次々と翻訳が完成し、『サルトル全集』の刊行は、1950（昭和25）年の3冊（佐藤朔、白井浩司訳『第１巻　自由への道Ⅰ　分別ざかり（上・下)』、伊吹武彦、窪田啓作、白井浩司、中村真一郎訳『第５巻　壁：短篇集』）からスタートした。

1952（昭和27）年には久吉を社長とする株式会社になっていたが、1966(昭和41)年に、慶応大とともにサルトルとボーヴォワールを招聘し、それを機に二代目の睦久が社長に就任した。1950年から60年代後半を中心とする『サルトル全集』の刊行期には＜サルトルの人文＞の異名をとった。

３．３．『サルトル全集』の成功

以上の経緯で刊行された『サルトル全集』は大成功を収めることとなる。『サルトル全集』は、最初期の時点では「翻訳が次々と出来、長篇『自由への道』第１部、有名な小説『嘔吐』、短編集『壁』、いずれも１万部はすぐに越しました。大成功でした。」という華々しさである。諸出版データの分析を通じて日本のサルトル受容の「最盛期」であることが確認される1966(昭和41)年のサルトル来日時点では、「『サルトル全集』の日本での総発行部数は、160万～170万部。他の出版社からの刊行分も合わせると200万部は超える見込み。また、そのなかでも『実存主義とは何か』が16万部でトップである」。[34]

この記事にある「他の出版社からの刊行分」についての記述には注意を払う必要がある。人文書院がガリマール社と独占的な契約を結んでいるため、サルトルの著作は、新潮文庫の『水いらず』[35]などごく少数の例を除いて文庫本では読むことができない。しかし有名出版社各社のいわゆる「文学全集もの」は別である。昭和20年代末～40年代にかけて、日本の出版業界に「全集ブーム」が起こったことは出版史的に重要な出来事として記録されている。[36]その波のなかで、サルトルの著作も人文書院の掲載許可を得た上でいろいろな全集に組み込まれて多くの読者を得た。収録されたのは著名作品に集中するが、サルトルの大衆的な人気について、これら全集に支えられた部分を評価しておく必要はあるだろう。[37]

サルトル来日の時点で、人気１位であったのは『実存主義とは何か』であるが、『サルトル全集』最大のベストセラーは『嘔吐』である。[38]初版1951（昭和26）年のこの本は、60年代末の頃にも半年ごとに１万部ずつ増刷される人気ぶりだった。[39]

日本におけるサルトルの受容を考える上で、全集という本国ではなかった形態がとられたことは、重要な意味を持つと思われる。戦後の混乱期に、生きる意味を真摯に考えたいと願う青年読者層のなかには、長期的に配本されるサルトルの著書を精神的な支えとしていた者もいただろう。それは出版社の側から見れば、持続的な読者を期待できる出版形態であったとも考えられる。

４．サルトル受容と日本の出版

４．１．サルトルをめぐる書籍と雑誌記事点数の推移

日本でのサルトルをめぐる全般的な出版状況がいかなるものであったかを知るための指標として、ここでは、（１）「サルトル」「実存主義」関連書籍出版点数［表１］　（２）サルトル関係

雑誌記事の点数の推移［表２］の２つに着目する。

まず（１）であるが、これは、国立国会図書館の蔵書検索システム（NDL-OPAC）を用いて作成したデータである。雑誌は除外し、単行本で、タイトルキーワード「サルトル」、「実存主義」がヒットしたものの総計である。次に（２）は、同システム「雑誌記事索引」の検索（タイトル：サルトル）と『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』の人名索引（サルトル）を合算し、重複を除いたものである。（１）と（２）を併用したのは以下の理由による。

- 一般的に、雑誌記事は書籍より準備期間が短いものが多いため、雑誌データのほうがより直接的にリアルタイムでの世相や読者の気分を反映していると考えられること。
- しかしそれを逆に見れば、ある程度持続的な関心の指標としては書籍データのほうが信頼性があると考えられること。
- 雑誌記事データの利点は、掲載雑誌によって、一般雑誌（大衆的な週刊誌までを含む）と、学術系雑誌（学会誌、ならびに執筆陣と内容から見て学会誌に準ずると考えられる「高級」誌が区別できるため、学術系雑誌を抽出したデータ作成が容易であること。

それでは、データの検討に移る。（１）のグラフから読み取ることができるのは、1965（昭和40）年にそれまでにないピークがあることと、この上昇傾向がさらに1968（昭和43）年までつづき同年に１年間に22タイトルという最高記録に到達した後、急降下し1969（昭和44）年の10タイトルを最後に、それまでの水準に戻ってしまうことである。

（２）からわかるのは、突出した山が２つあったことである。第一が1966（昭和41）年（55記事）をピークとし前後１年をあわせた３年間（1965－67）であり、第二が1980（昭和55）年である。

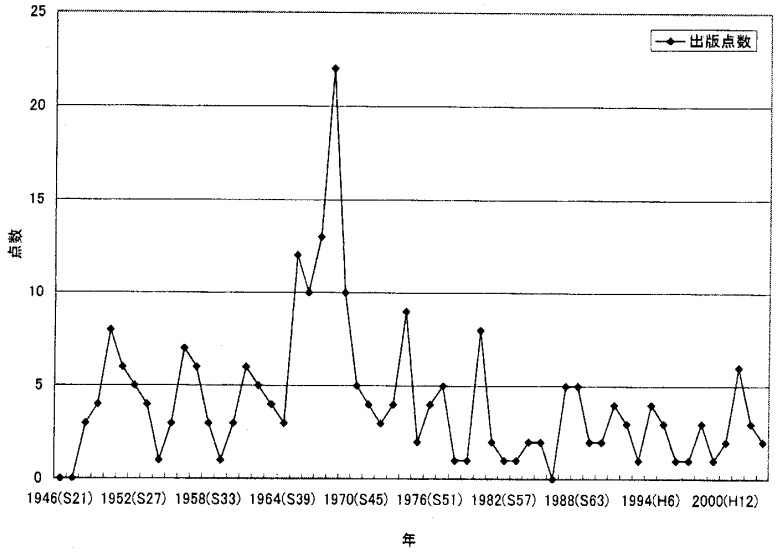
また、「全点数」と「学術系雑誌」のグラフを対照させてみると、この1966年を含む1964（昭和39）年から1972（昭和47）年までの期間と、1980年の２回の突出したピーク時以外は、グラフの形状が非常に類似していることがわかる。（例外は、①サルトルの受容初期の1948（昭和23）年から1951（昭和26）年の期間や②1996（平成8）年　などの２つのグラフの乖離である。しかし、①については、この時期は一般雑誌と学術系雑誌の違いが明確でないため、一般雑誌と分類される雑誌に学術的な雑誌論文が掲載されていることを考慮すると、これを過大評価するべきでないと判断できる。また、②の1996年について言えば、一般雑誌に分類される『文藝』がサルトル特集を組み一挙10本の論文を載せたためにこのような格差ができたが、これも『文藝』誌のトーンから判断すると①と同様の判断をするのが妥当であろう。）

1964（昭和39）年は、サルトルが自伝『Les mots』を刊行し、同じ年のうちに邦訳『言葉』が「サルトル全集」の第29巻として出版された年であるが、なにより大きなニュースとなったのは、サルトルのノーベル文学賞受賞拒否である。『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』によれば、この年の雑誌記事タイトル全８件のうち４件がノーベル賞辞退をテーマにしたものである。そして件数が跳ね上がる２年後の1966（昭和41）年は、サルトルが来日した年である。それまでリストに登場しなかった『平凡パンチ』や『女性自身』といった大衆週刊誌がサルトル来日を好意的に取り上げた。

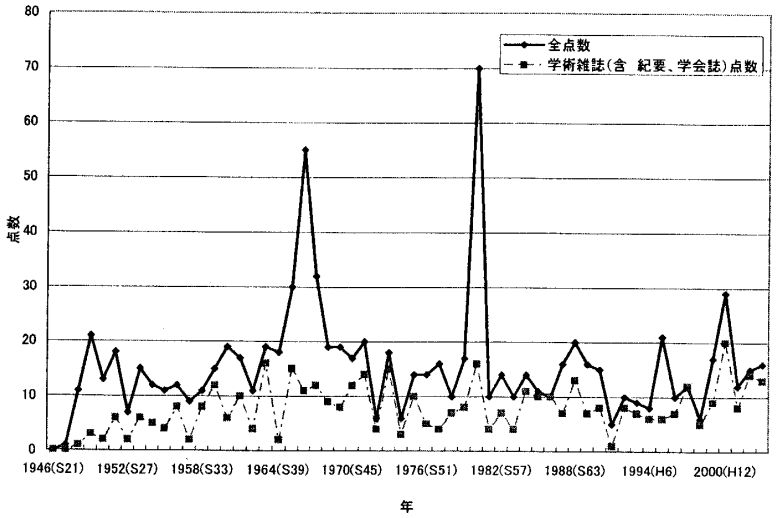
それ以後も1970代初頭まで、一般雑誌記事の点数が比較的多いのは、サルトルの政治的活動が、当時の世界あるいは日本の動揺する社会状況と関連付けて読まれていたことの証左であると考え

られる。しかし構造主義が思想界を制圧し、新しい現代思想が台頭するなか、サルトルをテーマにした記事の点数は大幅に減少する。

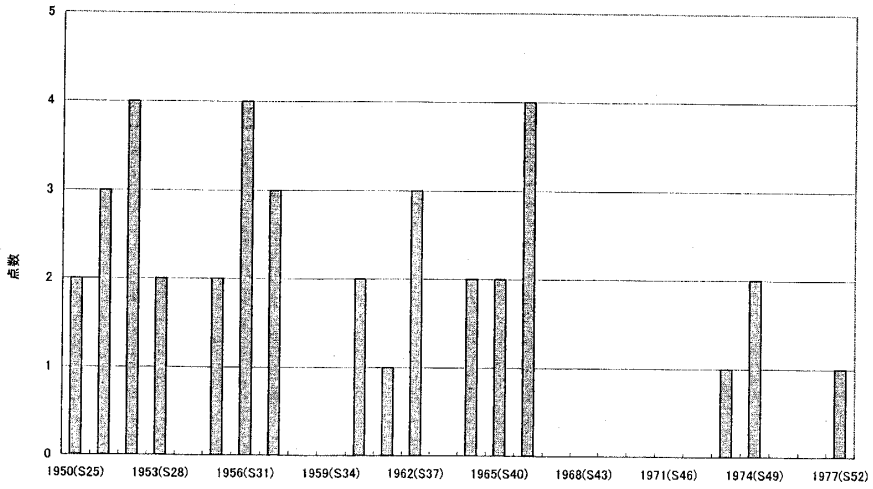
[表1]　「サルトル」「実存主義」関連書籍出版点数(1946-2003)



[表2]　サルトル関係雑誌記事点数の推移(1946－2003)



[表3]　人文書院「サルトル全集」年別出版点数(1950-1977)



雑誌点数が全期間中最高の（B）1980（昭和55）年についていえば、これはサルトルがパリで死去した（4月15日）年である。追悼記事が4月・5月の二か月で全雑誌合わせて18本掲載され、その勢いは年内は続いたが、翌年以降は再びそれまでの水準に戻る。これはどちらかといえば一過性の事件として考えることができるだろう。そしてこれ以後は、サルトルへの関心がこれらのピークのような高レベルに戻ることはなかった。

しかし、雑誌の点数を見る限り、サルトルが忘れ去られた存在になったと結論づけることはできない。二度のピークを除いては、雑誌点数に関していえば、実は1950年代から2000年にいたるまで大きな変化が見られないのである。ただ、サルトルへの関心のあり方が変ったということがグラフから読み取れることを指摘しておきたい。1980（昭和55）年以降、全点数と学術系の点数の2つのグラフが近づいて、ほとんど重なっていることから考えられるのは、1980年代以降サルトルは、学術的論文で論じられる存在となった、つまり、一般読者よりもアカデミズムの専門家（主に哲学と文学研究者）の関心対象となったということである。

4．2．人文書院　『サルトル全集』

人文書院の『サルトル全集』の発行年順の全巻リスト[40]をもとにして、内容のいかんを問わず、全集刊行の1950（昭和25）年以来の各年の刊行点数をカウントし、視覚化したのが［表3］である。このグラフからわかることは、全集をスタートした年から1957（昭和32）年までの8年間で20冊が刊行されており、主著に関してはこれでほぼ翻訳出版が完了しているということである。[41] そして短いブランクはあるものの、1966（昭和41）年までは継続的な刊行が行なわれ、実質的には1966年で全集の刊行は一応の完了をみる。この年、人文書院と慶応大学はサルトルとボーヴォワールを日本に招待した。その動機として「揺れ動く世界の中の日本の状況をつぶさに見てもらうこと、そして何よりも、彼の生の声を皆さんに伝えたかったのです（当時アメリカは、ベトナム内戦に介入し、日本は騒然としていました）」と渡辺社長は語っており、この招聘には全集の一応の完結を記念するという意味がこめられているということが想像できる。[42]しかし、全集の刊行に際しても機を見るに敏であった出版社としては、サルトルのいわゆる＜ブーム＞的な人気はこのあたりがピークという冷静な判断もはたらいていたのではないだろうか。

これまで検討した出版データから得られる知見は、すべて1966（昭和41）年を日本におけるサルトル受容のピークであったという結論を導くものである。本論では、サルトルのテキストを内在的な分析対象とする方法をとらないため、サルトルの思想内容がこの時期に世界情勢を受けてどのような軌跡を描いて変化していたかについては、それ自体が非常に重要な問題であるものの論じることができないが、この時期が歴史的に見て大きな意味を持っていたことを、強調しすぎることはないだろう。

本国フランスの知識人界において、サルトルの「覇権」の凋落が明らかになってきたのは、ボスケッティらも指摘するように1960年前後である。[43]この時期になると、サルトルが体現した「全体的知識人」というあり方とは反対の、知的分業の傾向、社会学や人類学といった人間科学の諸ディシプリンの発展の傾向が明白に現れていた。構造主義が、サルトルの実存主義を乗り越えたという判定[44]が優勢になり、知識人と政治との緊密な関係が自明視されなくなった。日本での受容のピークには、本国から遅れること数年のタイムラグが存在していることをここで指摘し

ておきたい。

おわりに

日本におけるサルトル受容の主要な期間は、およそ40年にわたっている。この間サルトルは、日本の知識人に対して、喚起力のある存在でありつづけた。サルトルの受容が始まった1930年代末から、戦後の本格的紹介、1966（昭和41）年のピークを経て、現在でもなお、一定の出版点数を保ち続けている事実は、＜文化輸入＞の知識社会学という関心からみても、注目に値する。

日本へのサルトルの最初の紹介者たちは、フランス本国とほぼリアルタイムでサルトルに接していた。戦時期にはいったん受容が中断し、その間のサルトルや実存主義の進捗が伝えられはしたものの、その翻訳が活発化するのは戦後になってからのことであった。その間の日仏間の「時差」によって、初期の紹介者が当惑するという興味深い事態も観察されている。

しかし、日本におけるサルトル受容の特徴を典型的に示す指標は、人文書院による、世界で唯一の『サルトル全集』の刊行であると思われる。函なし、比較的廉価、ばら売りの『サルトル全集』は、＜アプレ・ゲール＞の虚無的な気分の中から、生きる意味を問おうとする新しい世代の欲求に、多くの仏文関係者を動員しつつ、こたえようとした。思想家・文学者の全集が、このように入手しやすい形で刊行されるということは、フランス本国ではほとんど見られないことである。＜サルトル・ブーム＞を支えていた要因の一つとして、地方の一出版社の見識と決断をみることができるだろう。

サルトルの著作は、日本の専門家、非専門家の双方に受容された。受容層におけるふり幅の広さは、日本におけるサルトル受容のきわだった特徴であるといえよう。またサルトルの著作は、加藤周一、海老坂武（1934-　）、朝吹登水子（1918-2005）[45]のような、仏文アカデミズムの枠におさまりきらない、個性的で息の長い批評家・文筆家の活動をエンカレッジするものであることもここに付け加えておきたい。[46]

ブルデュー派社会学者らによる知識人研究、ラモンの文化の輸入研究に示唆を受け、アカデミズム、メディア、一般公衆を包括的に視野に入れた思想の受容＝輸入研究を深めていくことが今後の課題である。本論においては、ボスケッティの論のもつ制約を事実の例証を通して示唆するにとどまっているが、今後は、一つの界と他の界との関係の考察に道を開こうとするラモンの論の枠組みの検討を踏まえた比較社会学的な観点の理論的根拠をさぐる作業が必須のものとなるだろう。

[1] 評論家の坪内祐三（1958-　）は、サルトルの死の２年前の1978（昭和53）年早大文学部に入学したが、「執筆活動を断念していたものの、サルトルは、私が大学に入学した頃、まだ現役の思想家（作家）だった。大学に入学した直後、私は、高田馬場駅前のパチンコ屋で、その景品として、人文書院の、クリーム色の表紙が印象的だったサルトルの著作集を次々と集め揃えていったことがある。その内の一冊、『嘔吐』を携えて、私は、その年の夏休み、関西旅行に出かけた。京都から神戸に向かう在来線の車中で読み終えた。私にとって、『青春の一冊』である」と回想している。（『新書百冊』、新潮新書、2003、p.153）　坪内は同時代人としてサルトルに触れることのできた最後の世代に属している。70年代後半の日本は、「知の世界での大きな変動、いわゆるパラダイム・チェンジが進行しつつある」時期であり、「文学や哲学、現代思想といった本来的なカルチュアーの中でも、新しい知識人が古い知識人に取って

代ろうとしていた」(同、pp.123-124)。そして80年代初頭には、いわゆる「ニュー・アカ」ブームが席巻するにいたる。坪内の回想は、日本の「ニュー・アカ」ブームが、サルトル（もしくは実存主義）の否定または軽視という形をとっていたこととあわせて検討されるべき内実をもっているといえる。

2 サルトルの没後20年を経て、フランス本国のみならず日本においても「サルトル・ルネッサンス」と呼びうるような状況が観察されているが、そのことについては紙幅を改めて論じることにしたい。

3 Boschetti, A. Sartre et <<les Temps modernes>>, Editions de Minuit, 1985（ボスケッティ、『知識人の覇権』、石崎晴己訳、新評論、1987、p.iii）

4 「経済不況、戦争、占領、植民地戦争、冷戦を通して、悲劇的に歴史を発見していき、前代未聞の経験を表現し合理的に説明しうる哲学的教養を特権的に重視した社会の、特殊な要求」（ボスケッティ、前掲書、pp. 46-47）

5 American Journal of Sociology 93 n.3 (November 1987)

6 ある一つの理論がある学問領域の無視できない一部分として認識されるようになるプロセスを指す。

7 後期の内容については、紙数の都合上ふれることができないので稿を改めることとしたい。

8 白井浩司、『「サルトル」入門』、講談社現代新書、1966、p.12

9 1909年ジイドら作家グループによって創刊された文芸雑誌。1911年よりガリマール社刊。特に両大戦間期には「文学の殿堂」（ボスケッティ、前掲書、p.46）とみなされるほどの大きな影響力をもった。

10 白井の一歳年下の小説家・中村真一郎（1918-97）は当時一高から東大仏文科に進んだ頃であるが、「私がはじめてサルトルに接したのは、戦前の二十歳の頃で、その頃、彼は新進の批評家として、当時のパリ文壇を支配していた、ジード一門の雑誌『新フランス評論』誌に、鋭い現代作家批判や、巻末の合評記事を盛んに書いて、私たちの注意を惹いていた。」と回想している。（中村真一郎　「サルトルの翻訳について」；『現代詩手帖特集版　いま、サルトル』、思潮社、1991、p.18）

11 当時、経済学部予科の専任教員。

12 それ以前に、『ラ・ノーゼ』についての佐藤朔による紹介文は、彼がボードレールの『悪の華』の全訳を出版していた第一書房の雑誌『セルパン』に掲載されていたが、白井はこの時点では、この紹介文を未読であったという。

13 紙幅の都合上本稿において論考する余地はないが、そもそも日本でのサルトル受容の背景には、それまでにすでにフランス文学・文化への関心が知識人たちに分かちもたれていたことが大きいという指摘をせざるを得ない。そのような背景を考察することなく、「これほどフランスから遠く離れたところで、これほどフランス文学が広く翻訳され、これほど広く読まれている国は、おそらく日本国の他にないだろう。たとえば、ランボーやヴァレリーの翻訳全集が刊行されたり、ジッドやサルトルの著作が本国においてよりも多くの読者をもち得る国が、他にあろうとは思われない。」（加藤周一、「序文」；『パリ1930年代』、ドゥ・ベルヴァル著、矢島翠編訳、岩波新書、1981）と言われるような状況が生じたことの説明をすることは不可能であろう。日本近代におけるフランス文化の受容についての探求は別の機会の課題としたい。

14 清水文吉、『本は流れる――出版流通機構の成立史』、日本エディタースクール出版部、1991、p.98

15 中村；『いま、サルトル』、pp.22-23

16 西永良成、「フランス文学」；『翻訳百年――外国文学と日本の近代』、原・西永編、大修館書店、2000、p.58）

17 終戦直後の京都の出版状況を知る上で好個の資料が、日本書籍出版協会京都支部編『わたしの戦後出版史――京都の出版の回顧と展望』(2001)である。ミネルヴァ書房、世界思想社、人文書院といった京都を代表する出版社の重鎮たちによる京都の戦後の出版史についての証言が記録されている。

18 『わたしの戦後出版史』より　ミネルヴァ書房代表取締役会長の杉田信夫（1921-　）による。

19 以下世界文學社に関しては、扉野良人による『Sumus』第4号（2000年9月）に詳しい。

20 一例を挙げれば、生島遼一、森有正、福田恒存、三島由紀夫、中野好夫、三好達治、桑原武夫ら。

21 紹介文は、「ジャン・ポール・サルトルは、目下フランスの文学界思想界に大波紋を捲き起こしつつある＜エグジスタンシアリスム（実存主義）＞の提唱者である。」という一文から始まる。

22 伊吹武彦訳。

23 中村；『いま、サルトル』、p.20
24 「水いらず」の訳者である吉村道夫に関して伊吹武彦が「後記」で、「水いらず」を「若くして戦場に逝った吉村道夫氏の偉業」と記していることを考慮すると、この翻訳は日本のサルトル作品の翻訳のなかでは非常に早い時期のものだと判断できる。ただし、いつなされたものかは現時点では不明である。
25 大雅堂は、戦争中の企業整備により強制的に14の出版社が統合されてできた総合出版社である。社会科学、法律、農学、保健、科学など非常に幅広い出版を行ない、また総合誌『時論』（編集長は読売新聞にいた嬉野満州男）を出していたが、1949（昭和24）年には倒産した。
26 以上はミネルヴァ書房の杉田の証言による（『わたしの戦後出版史』）。
27 白井浩司、「『嘔吐』との関係－サルトルの栄光」；『いま、サルトル』、pp.29-30
28 朝吹登水子、『わが友　サルトル、ボーヴォワール』、読売出版社、1991
29 海老坂武、「サルトル」；『社会学事典』、弘文堂、1988
30 朝吹登水子、『サルトル、ボーヴォワールとの28日間―日本』、同朋社出版、1995
31 以下、人文書院についての渡辺睦久の発言は、『わたしの戦後出版史』による。
32 清水、前掲書、p.63
33 全集第６巻 1951年刊。
34 『女性自身』1966.9.26号 サルトル・ボーヴォワール来日特集記事での人文書院へのインタビュー。
35 伊吹・白井・窪田・中村訳、1971
36 1952（昭和27）年の角川の『昭和文学全集』（全60巻）が戦後出版史を飾る大ベストセラーとなり、「全集ブーム」の引き金になったと言われている。
37 『現代世界文学全集　第20巻　＜サルトル、ボーヴォワール＞』　新潮社　1953、　『世界思想教養全集　第24巻　＜フランス実存主義＞』　河出書房新社　1962、　『世界文学全集　第46巻　＜サルトル、アラゴン＞』　河出書房新社　1962、　『世界の文学　第49巻　＜サルトル、ビュトール＞』　中央公論社　1964、　『世界文学全集　第25巻　＜サルトル、ニザン＞』　集英社　1965、　『世界文学全集　第38巻　＜サルトル、カフカ＞』　河出書房　1968など
38 2001(平成13)年の時点で「40万部に達している」（人文書院データ）
39 同社編集者の証言。『アエラ』1999.4.26号による。
40 各巻の全内容目次と翻訳者名のリスト（本稿では省略）。
41 第5巻（短編集『壁』）や第6巻（『嘔吐』）のように、以前に他社から単行本化されていたものも含まれる。
42 サルトルとボーヴォワールの日本滞在については、全行程を同行した朝吹登水子の記録『サルトル、ボーヴォワールとの28日間―日本』、ボーヴォワールの回想録『決算のとき』に詳しい。
43 ボスケッティ、前掲書、p.445 など。
44 レヴィ＝ストロースが激しいサルトル批判を展開した『La pensée sauvage（野生の思考）』の刊行は1962年である。
45 福沢諭吉の門下生であり慶応義塾の創設に尽力した朝吹亮吉の孫娘である朝吹登水子は、ボーヴォワール、サガンの翻訳者として知られているが、1966年のサルトルとボーヴォワール来日時に通訳・案内者として絶大な信頼を得、爾来二人との交流がつづいた。アカデミズムから離れた立場から日本の公衆に二人の素顔を紹介し続け、また加藤周一や海老坂武に私的な場でサルトルに引き合わせるという「キー・パーソン」的な役割を果たした。
46 加藤、海老坂、朝吹が後期の受容に果たした役割については、修士論文『日本におけるサルトルの受容』（2005年京都大学教育学研究科）において、考察を試みている。

（教育社会学講座　博士後期課程1回生）

（受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日）

A study on the Introduction of J.-P. Sartre to Japan : From the Perspective of the History of Publishing

ISHII Motoko

Jean-Paul Sartre (1905 - 1980) is one of the representative authors and thinkers of the twentieth century. This paper attempts to describe and analyze the manner in which he was introduced to and received in Japan, where his works have been read the most globally, through the bibliographic data and the discourses of the people concerned. Though the importation of Sartre to Japan started as early as the end of 1930s, soon after he had started his literary activity in earnest in France, it was not until the end of World War II that it was launched fully. The diffusion of Sartre's work peaked at around 1966. The publication of the translation of his works that involved many translators started in 1950 in the form of complete works. This is unique in the world, and the young publisher in Kyoto who aimed it at young people who were searching for the meaning of life in the postwar period. This successful project certainly contributed to the enlargement of Sartre's readers in Japan. Both the intellectual and general readers received Sartre's work and this range of readership is a feature of Sartre's reception in Japan. This study is one of the case studies based on the perspective of the study of <cultural importation> in which an analysis is made of the way the works of important intellectuals are received abroad.